

3 キウス4遺跡・キウス周堤墓群における周堤墓の分類と新旧関係

1 周堤墓の分類

周堤墓を主にその規模を中心として分類してみる。

キウス4遺跡および国指定史跡キウス周堤墓群の周堤墓の規模をあらわしたものが図IV-5である。規模から大きく5群（小さくは7群）に分かれる。それぞれの群には4～5基の周堤墓がまとまる。

第1群 キウス4遺跡X-12・13・14・15・16

外径は10m前後で内径は6～7m、掘り込みは10m前後と浅く周堤は見られないか、かなり不明瞭であるもの。したがって、出入口も確認できない。マウンドはなく、堅穴内遺物もほとんどない。

墓壙数は1～3基である。平面形は長軸長が200cm近い長いものと100cmほどの短いもの^{注1)}が混在しており、いずれも幅が狭い（図VI-10）のが特徴である。墓標はX-15でのみ確認された。墓壙にベンガラは無く、副葬品もほとんど無い。墓壙の長軸方向はN64～81°Wで、他の同一周堤墓内よりもまとまりが良い。

墓標・副葬品の有無によりa・b類に細分できる。

1群a類 墓標・副葬品のないもの X-12・13・14

墓壙数は1～2基である。

1群b類 墓標・副葬品のあるもの X-15

墓壙数は3基で、墓標と思われる木柱痕は墓壙内にある。副葬品は1基から漆器が検出された。また埋土は上部がローム、下部がパミス主体で明瞭に分離しており、壁面に見られる基本層序と深さに対応している。

第2群 キウス4遺跡X-3・5・7・11・17・c

外径は20m前後で内径は約10～14m、堅穴の深さは30cm・盛土厚は20cmほどであるもの。周堤は高まりが感じられる程度であるが、出入口は確認できる。マウンドがあるものもある。堅穴内の遺物は少ないが、小型鉢が出土した例もある。

墓壙数は全掘したX-17から5基程度であると推測される。長軸は全て出入口に向かっており、そのため長軸方向のブレが生じている。

本群は墓壙の形状、墓標の有無、ベンガラ・副葬品の有無などは周堤墓により若干様相が異なる。

X-17の墓壙は丸みが強く、長軸長が短い。ベンガラは壙底と埋土中の2回散布され、副葬品も多く、石鏃・石斧・ひすい玉がある。

一方のX-11の墓壙は細長く、墓標は長軸両端に木柱痕がある。また、埋土上部を突き固めている可能性がある。堅穴から小型鉢の土器片が出土し、復元できた。

なお、X-αは墓壙数が4基で、墓壙の規模、配列、墓標の在り方などから本群に分類されると思われる。

第3群 キウス4遺跡X-1・2・6・10・a・b・d、キウス周堤墓群1号・12号

内径が16～19mで、堅穴はしっかりと掘り込まれ、周堤も明瞭で、出入口も確認できるもの。外径は23～37mとばらつきがあり、他の群と比べてグラフ上で散在するが、内径のまとまりから一群として把握できると思われる。また、堅穴内からは、小型鉢の他に注口土器も出土し、一部には石器も見

られる。また、マウンドがあるものもある。

墓壙数はその規模から10基以上になると思われる。墓壙は長いものと短いものが混在するが、合葬墓を除くと幅が広くなり、長軸長も若干短くなり、丸みを帯びる傾向がある（図VI-10）。床面にベンガラが確認される墓壙は約半数と多く、副葬品は少ない。木柱の墓標は長い墓壙だけではなく、丸い墓壙にもみられるようになる。また、壙口内に石柱がある例もある。

外径や石柱の墓標の存在、堅穴内遺物から2小群に分けることができる。

3群a類 外径が30m以下で、墓標が木柱のもの

キウス4遺跡X-6・10・a・d、キウス周堤墓群12号

X-10の堅穴内からは墓壙の壙口部を中心に注口土器・小型鉢形土器が出土し、X-6でも深鉢形土器が2個体確認された。墓標は長軸両端もしくは一端にあるもの9基と多く、ベンガラも半数以上の墓壙にみられた。また、壙口部を粘土で突き固めている墓壙があった。長軸方向は北西を中心にはばらつく傾向がある。

3群b類 外径30m以上で、墓標に石柱が使われる墓壙があるもの

X-1・2・b、キウス周堤墓群1号

キウス1号では堅穴内から土器のほかに石鏃も出土した。墓壙は長軸長が短くなり、更に丸みを帯びる。墓標には立石も使用され、X-1・キウス1号では墓壙内にあった。また、砂岩の偏平礫が壙口部に置かれていた例もある。X-1マウンド上の墓壙は床面にベンガラが撒かれており、副葬品はなく、埋め土上部はa類と同様に固くなっていた。

第4群 キウス4遺跡X-4、キウス周堤墓群3・5・6・7・11号

外径41~50m、内径25~30mで堅穴と周堤上部との比高差は1mほどもあり周堤がかなり顕在化するもの。そのため出入口はより明瞭となっている。堅穴内の遺物は少ないが3群b類同様石器も出土し、X-4でスクレイパーが確認された。マウンドはX-4で複数あった。

墓壙数はトレンチ調査のX-4で8基程が確認されており、その密度から10基以上で20基ほどの存在が想定される。規模は最も長軸長が大きいものでも1.5m程と短くなっている。墓標にはX-4、7号のように立石も見られるが、その位置は3群とは異なり墓壙外にもみられるようになる。また、墓標に関係すると思われる小土壙が同じくX-4の墓壙外にあった。副葬品は不明である。

第5群 キウス周堤墓群2・4号

外径75m、内径32~45m以上と巨大なもの。2号の床面から周堤頂部までの比高差は5.4mもある。2基ともに出入口がある。堅穴内からは2号で土偶・石鏃・ベンガラの付着した石皿が出土しており、最もバラエティに富んでいる。

墓壙は2号で1基が確認された。平面形は円形に近く、墓壙の周辺に偏平礫8個が配置されていた。ベンガラが床面にあり、石鏃が副葬されていた。

2 キウス4遺跡における周堤墓の編年

① 重複関係

本報告に記載されているように、平成9年度の調査において周堤墓が重複して発見された。このうち、新旧関係が明らかなのは、X-12→X-11、X-13→X-11、X-12→直線状盛土、X-10→直線状盛土である。また直線状盛土はX-10構築直後に作られたと考えられることから、X-10のほう

がX-12よりは新しいと推測される。以上を示すと次のようになる。

X-12・X-13→X-11・X-10→直線状盛土

この段階ではX-12と13、X-10と11の新旧関係ははっきりとはしないが、規模の小さい周堤墓が相対的に古い傾向を指摘できる。

② 土器編年

次に出土遺物から構築順番を考えてみる。(図VI-6～8参照)

X-12では台付浅鉢(1)が床面から出土した。小型の鉢(2・3)は出土層位や位置からX-11から流れ込んだものと考えられる。1は厚手で口縁の断面が角形であり、後期中葉の土器に近い。また、GP-1201と床面出土の土器が接合した4は厚手で羽状縄文が施されている。ほぼ同じ時期と考えられる5には大きめの突起がある。これらことから1・4・5は堂林式の中でも最も古く位置付けられるものであろう。

X-13出土の小型鉢(6)は2・3と同様にX-11から流れ込んだものと考えられる。

X-14・15からは小破片が竪穴内・周堤上から出土したのみである。この内、比較的特徴が明確な口縁部破片を図示した。7は口縁断面が切り出し形で刻み列があり、羽状縄文が施されたもの、8は口縁断面が角形のものである。いずれも、X-12と同様に古手に位置付けられると考えられる。

X-17では周堤上から破片が出土している。中央に大きな攪乱があることや離れて存在し、周辺に遺物が見られないことから、それらが周堤墓に伴う可能性は高いと考えられる。11は深鉢と思われる破片で、平縁から飛び出す大きめの突起がある。やや粗雑な羽状縄文や太めの刻み列、大きめの突起はやや古い要素と考えられる。一方で、器壁が薄手で新しい要素もある。はっきりとは決め難いが、古手に位置付けられ、X-12出土土器よりはやや新しい段階と推測している。

X-11では出土遺物が多いが、多くは風倒木攪乱中の出土である。確実に伴うと思われるのは床面出土の13・14の小型鉢で、特に13は典型的な堂林式土器である。また、X-11から流れ込んだと考えられるX-12・13竪穴内出土の小型鉢(2・3・6)もほぼ同じような時期のものであろう。

X-10では墓壇の墳口部に置かれた注口土器(19)の他に、注口土器2点、小型鉢1点が復元できた。小型鉢(18)はGP-1006内と竪穴床面出土の破片が接合したもので、太めの沈線で菱形文が描かれている。19は磨消し縄文と曲線文からなり、20は床面出土で粗雑な弧線文が施される。21は破片の多くが周堤上から出土したもので、弧線文・貼瘤が施され、口縁部の立上がりの形状から他の注口土器よりは新しく、三ッ谷式に近いものである。小型鉢はX-11の小型鉢に近いが、注口土器はより新しい時期のものであろう。土器の文様からある程度の期間にわたり使用されていることがわかる(以上、出土土器の分類については大沼氏の御教示を得た)。

X-6では胴部に無文帯があり平行沈線文、平行沈線文と直線による山形?の沈線文が施された深鉢形土器がまとまって出土している。またX-α(LP-8)墓壇出土の土器片は2本の平行沈線が施されている。いずれも、X-11や10出土の小型鉢に近いものであろう。

また、X-1の竪穴内からは貼瘤と微隆起線の施された精製の注口土器口縁部破片(29)などが出土している。X-10よりも新しく位置づけられるものであろう。

以上から、X-17については位置付けが難しいが、竪穴内出土の土器編年からみるとX-12・14・15→X-17?→X-11(・α?)→X-10(・6・α?)→X-1の構築順が想定できる。

残る、X-13はX-12・14と構造が似ており、X-11と13の重複関係からも基本的にはX-12・14と同じ時期のものであろうと考えられる。

③ キウス4遺跡における周堤墓の編年

①周堤墓の重複関係と②土器編年からみた構築順は矛盾せず、時間とともに次第に規模が大きくなり、X-12~15(1群)→X-17(2群)→X-11(2群)→X-10(3群a類)→X-1(3群b類)への変遷がとらえられる(図VI-6~8)。

この変遷によりベンガラ・墓標などが次第に顕在化し、堅穴内遺物が増え、墓壙は幅が狭いものから次第に広くなり、次いで長軸長が短くなり、大局として丸みを帯びるようになる傾向が見られる。

ただし、基本的な傾向としての規模拡大は想定できるが、必ずしも単純に変遷するものではなく、漸移的に変遷していったと考えられる。

例えば、X-15は副葬品・墓標があることなどは2群のX-11・ α に近い要素である。また、2群の内、X-17の出土土器から伺える構築時期は同じ2群のX-11よりは1群に近いと思われる。これからことから、1群2群は時間的に一部重複して並存していた可能性がある。

3 キウス周堤墓群との関係と編年

キウス周堤墓群では1・2・7号の一部が調査されている。このうち、1・2号出土の遺物は『千歳遺跡』(千歳市 1967)に示されている(図VI-9)。

1号では口縁部につまみ上げたような刻み列があり、曲線が多用され三叉状の文様が施された深鉢が出土している(3号墓壙-1)。2号では土器は破片のみが出土し、このなかには爪形文や沈線で三叉状文が施され、貼瘤のある破片がある(2号土籬-1)。いずれも貼瘤や曲線文、なかでも三叉状の文様からキウス4遺跡X-10~17出土の土器よりは新しいと考えられる。

また、キウス4遺跡内の周堤墓と盛土遺構に対応するように、キウス周堤墓群にもキウス遺物包含地がある。その下層(第5~7包含層)からは三叉文や、沈線での弧線文・入組文、つまみ上げた爪形文が施された深鉢、注口土器、壺形土器などが出土している。三ッ谷式から御殿山式に相当すると考えられる。

これに対して、キウス4遺跡の盛土遺構では貼瘤や三叉文、つまみ上げた爪形文が施された土器は少量である。

これらのことから、全体的にキウス4遺跡が古く、キウス周堤墓群が新しいと言える。また、キウス周堤墓群内の個々の周堤墓について大谷は規模が次第に拡大する傾向を指摘し、11→4→1→3号、12→5→2号の構築順を推定している(大谷 1978)。

12→5→2号の変遷は周堤墓分類の3群→4群→5群と対応する。11→4→1→3号は4群→5群→3群→4群となり、必ずしも分類とは一致しない。しかし1号の形状から伺えるように、同じ場所に隣接して構築されたため規模が制約されたと推測されるのである。1号の掘り込みの深さは5群に相当し(図VI-5)、また次の段階では規模が拡大していることから、例外はあるものの、基本的には規模が拡大する傾向を有しているのであろう。

以上から、キウス4遺跡からキウス周堤墓群への変遷、キウス周堤墓群のなかでは基本的には3群→4群→5群と規模が大きくなる傾向が指摘できる。

4 キウス4遺跡、キウス周堤墓群における周堤墓の分類と諸要素の変遷

2・3から基本的には1群→5群、キウス4遺跡→キウス周堤墓群へ変遷し、規模が拡大し、掘り込みが深くなり、周堤が明瞭になってゆく傾向が指摘できた。この変遷に伴い、墓壙の形状などの諸要素にも変化が見られる。これらをまとめたものが表VI-3である。

堅穴内の遺物は無いがあってもほとんどまれ→鉢→鉢・注口土器・壺形土器→土器+剥片石器→土器+剥片石器+礫石器+土偶、と次第に多量化・多様化する。つまり、埋葬後の儀礼に関わる供献土器（乾 1981）が次第に多くなる傾向が指摘できる。

墓壙数は規模に応じて1→2→5→10程度→20程度と増加すると思われる。しかし、堅穴全域に墓壙を作ることなく廃絶されたものもあり必ずしも明確ではない。

墓壙の形状は当初かなり幅が狭く、長いものと短いものが混在するものと（X-12~15・X-11）と後期中葉の墓壙に近い丸みが強いもの（X-17）があり→幅が広くなる→次いで長軸も短くなる、と変遷する（図VI-10・11）。幅/長がまとまり同一周堤墓内・同一群内の墓壙間の差がしだいになくなり、次いで幅/長の数値が大きくなり（図VI-13・14）、全体として丸みを帯びようになる。これは、林の見解（林 1993・1998）とおおよそ一致する。ただし、その変遷は必ずしも一方向的なものではなく、特に最初のころは周堤墓間・各墓壙間の差が大きい。被葬者の何らかの区分や系譜の違いを反映しているとも考えられそうである。

墓標は、無い→細長い墓壙内の長軸1端もしくは2端に木柱→丸い墓壙の墓壙内へも木柱→立石があるものも現れる、と変遷し、墓標のある墓壙数も増える傾向にある。墓標の位置は墓壙内→墓壙外への漸移的な変遷がとらえられ、美沢川流域の遺跡群における乾の分析（乾 1981）と一致する。なお、礫（多くは破碎されている）が壙口部に置かれるものは2群から5群にかけて見受けられるが、柏木B遺跡のように積石となるものはない。

ベンガラは、無い→床面・埋土中の2回散布あり→床面散布となる。4・5群の様相は不明である。林の指摘したベンガラが減ってゆく傾向（林 1993・1998）はキウス周辺では必ずしも明瞭ではない。

副葬品は全く無いものから→漆製品→漆製品と弓→石鏃となり、古い段階には少ないと言える。しかしX-17が例外的に多く、キウス周辺では全般的に少ない傾向があり、規模拡大に伴う副葬遺物の顕在化（大谷 1978）はとらえがたい。むしろ、遺跡間・周堤墓間の格差がありそうである。

墓壙の埋め方は、なんら規制無く黒色土が途中に混じる→下方は未風化のパミス主体、上方はローム主体の基本層序に対応した埋め方→更に埋土上部のロームが堅くつき固める→一部墓壙では上部に黒色土をつき固める、と変遷する。これは堅穴の掘り込みの深さと関連し、堅穴が深くなるほど墓壙上面をロームで充填し、墓標のみが目立つ状況が推測できる。また、マウンド上の墓壙で黒色土を充填するものは、他の墓壙と比べて床面との色彩のコントラストが際立つこととなる。

墓壙の長軸方向は、周堤墓が異なっても揃う→出入口を向くようになりブレが生じる→更に大きくばらける、となる。これは、当初は明確な出入口がないこと、及び周堤墓の規模が拡大し墓壙数が多くなり、特に堅穴内の縁付近に配置された墓壙でのブレが大きくなったためである。

なお、マウンドについては無いもの→あるもの→複数あるものへと変遷する。ただし、マウンドは古い段階から現れ、矢吹の指摘（矢吹 1982・1985）とは異なり必ずしも変遷の新しい段階にのみ固有のものではなさそうである。

これらのことから、規模が拡大し新しくなるにつれ、葬送に関わる規制は強化される場合が多い（堅穴内遺物、副葬品、墓標、埋め方など）と言える。一方で頭位方向など規制が弛緩する要素もある。また、墓壙の形状は極端に長く狭い墓壙が初期にあり墓壙間の差もあるが、次第に旧来の風習が強まり丸くなり、相対的に画一的になってゆく。

5 他遺跡との比較

以上の分類と編年は今回のキウス4遺跡の成果と、キウス周堤墓群の測量成果から導き出したものである。他の遺跡の周堤墓との比較を試みたい。

美沢川流域の遺跡群では、大沼によって主に土器編年から環状土籬類似遺構（BX-1、JX-1・2、KX-2）→環状土籬（JX-3・4、KX-1）への変遷が指摘されている（大沼 1979）。これを発展させた乾は更に、JX-1・2→KX-1→JX-3・4への変遷を示し（乾 1981）、木村も規模拡大を肯定している（木村尚 1984）。

このような規模が拡大する美沢1遺跡と同様の変遷がキウス4遺跡でも確認できる。しかし、美沢1遺跡では出土遺物がキウス4遺跡よりも若干新しい、規模が小さい、墓壙数（密度）が多いなど、その様相は若干異なる。

一方で、発掘数の増加により重複関係が明らかになると、竪穴規模・墓壙数は構築順とは関係ないとの説（矢吹・野中 1985）も出てきた。しかしこれはキウス周堤墓群と同様に、複数がまとまり近接して構築されたため既存の周堤墓との関係で規模が制約され、規模拡大の傾向を示さない例と考えられるのである。

6 キウス4遺跡の特徴

キウス4遺跡では大沼・乾の見解と一致し、規模が拡大する傾向を有している。そして若干の前後はあっても、基本的には周堤墓の規模拡大とともに竪穴内遺物の顕在化、墓壙平面形の円形化、墓標のある墓壙の増加と石柱の出現、墓標位置の移動などの傾向が指摘できる。

一方で、出土遺物から美沢1遺跡JX-3・4、柏木B遺跡1号はほぼ同じ時期であり、キウス周堤墓群4群もしくは5群の時期に対応すると思われるが様相は各遺跡間で非常に異なる。

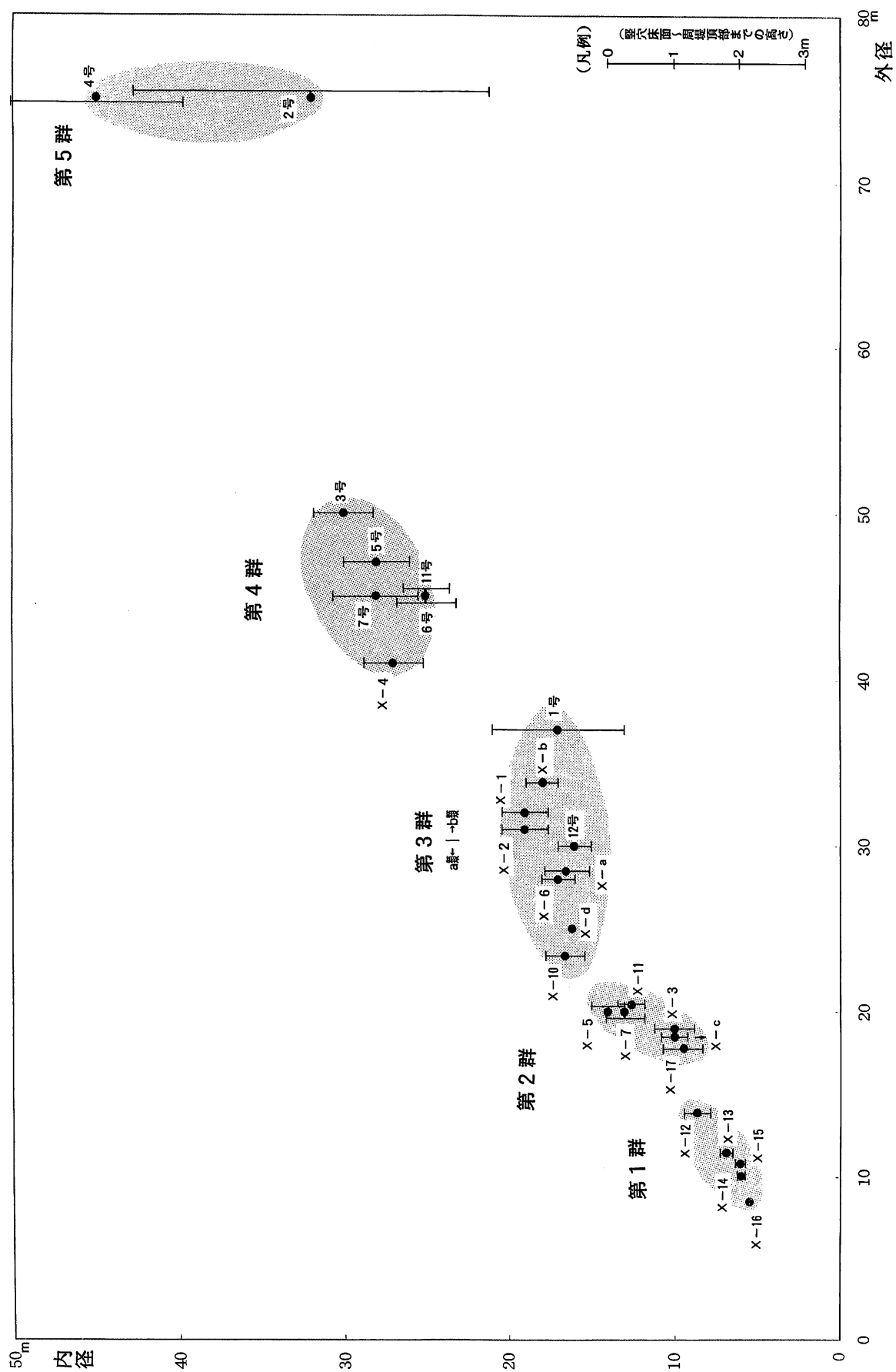
キウス周辺では他の遺跡と比べても規模拡大の傾向が顕著であり、墓標に立石を使うことが少ない、副葬品は後の段階になっても少ないなどの特徴がある。

これに対して、柏木B遺跡1号では積石が特徴的で、墓壙の平面形は丸い傾向が強く、竪穴内遺物・副葬品も多い。美沢川流域では中央マウンドの高まりが顕著で、溝をめぐらせた単独墓もあり、立石も多い。

このように、周堤墓規模拡大などの基本的傾向は一致するものの、それぞれの地域において相違点もあり、同じ周堤墓を構築していてもなお集団（部族？）による地域差としてとらえることができると思われる。
（藤原秀樹）

注1）美沢1遺跡では伸展葬と屈葬がわかる14例から、床面長軸長1.5m以上を大型墓壙（伸展葬）1.5m以下を小型墓壙（屈葬）とした（道教委 1979のほか、乾 1981、矢吹 1982）。また、瀬川は墓壙の幅／長さ比から0.5以上を屈葬、0.4以上を伸展葬、0.4～0.5を不明とした（瀬川 1980）。林は壙口部の長さ1.9m以上・幅／長さ比0.4以下を伸展葬、長さ1.6m以下・幅／長さ比0.4以上を屈葬とした（林 1993）。

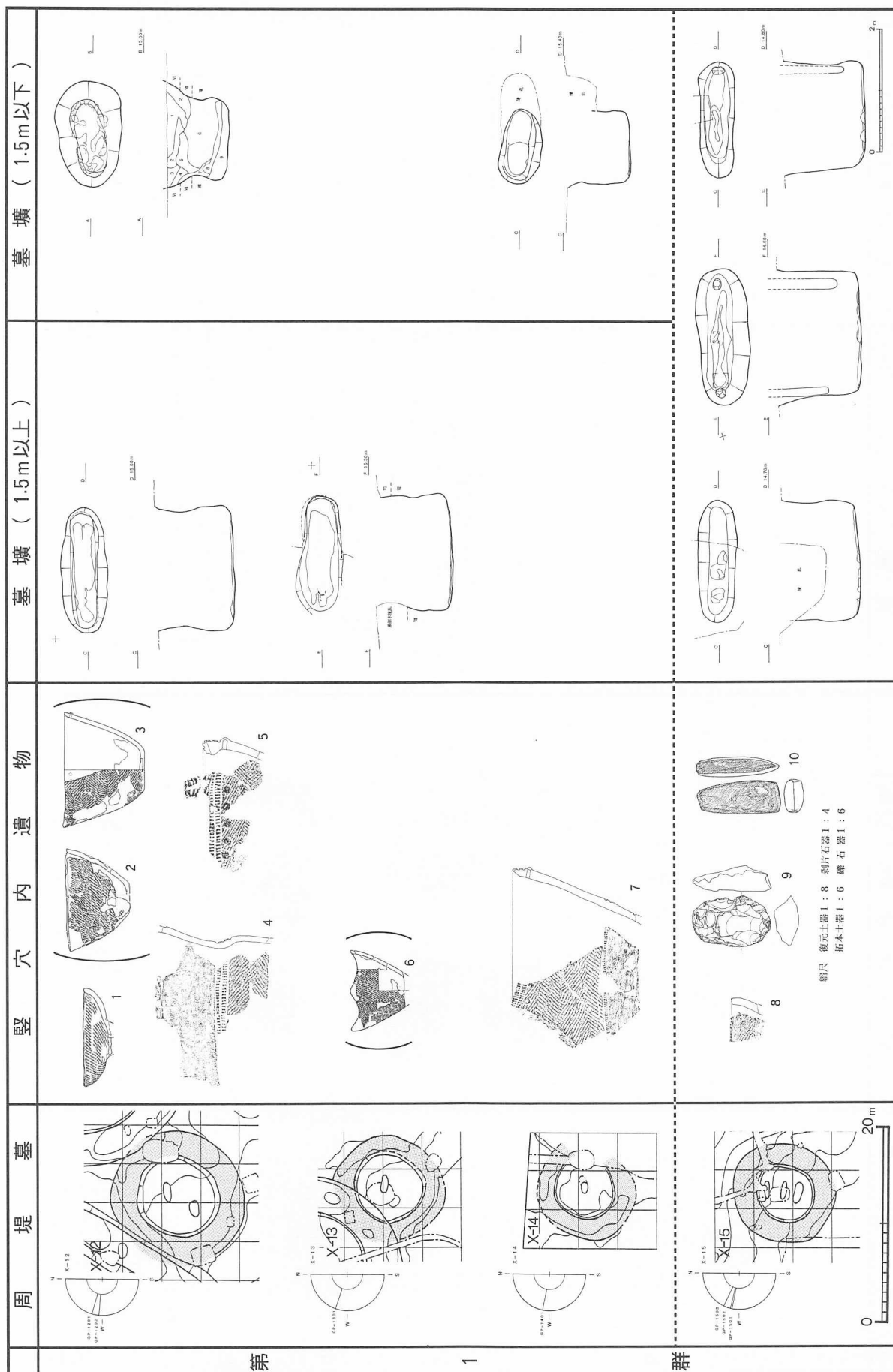
本遺跡では遺体の残存状況が不良で判断し難いが、美沢1遺跡と同様に1.5mを境に分布が分かれそうである（図VI-10）。そのため、以下の本文では取り敢えず1.5m以上を長い墓壙、1.5m以下を丸い墓壙と記述する。これは埋葬体位と不可分のものと考えている。



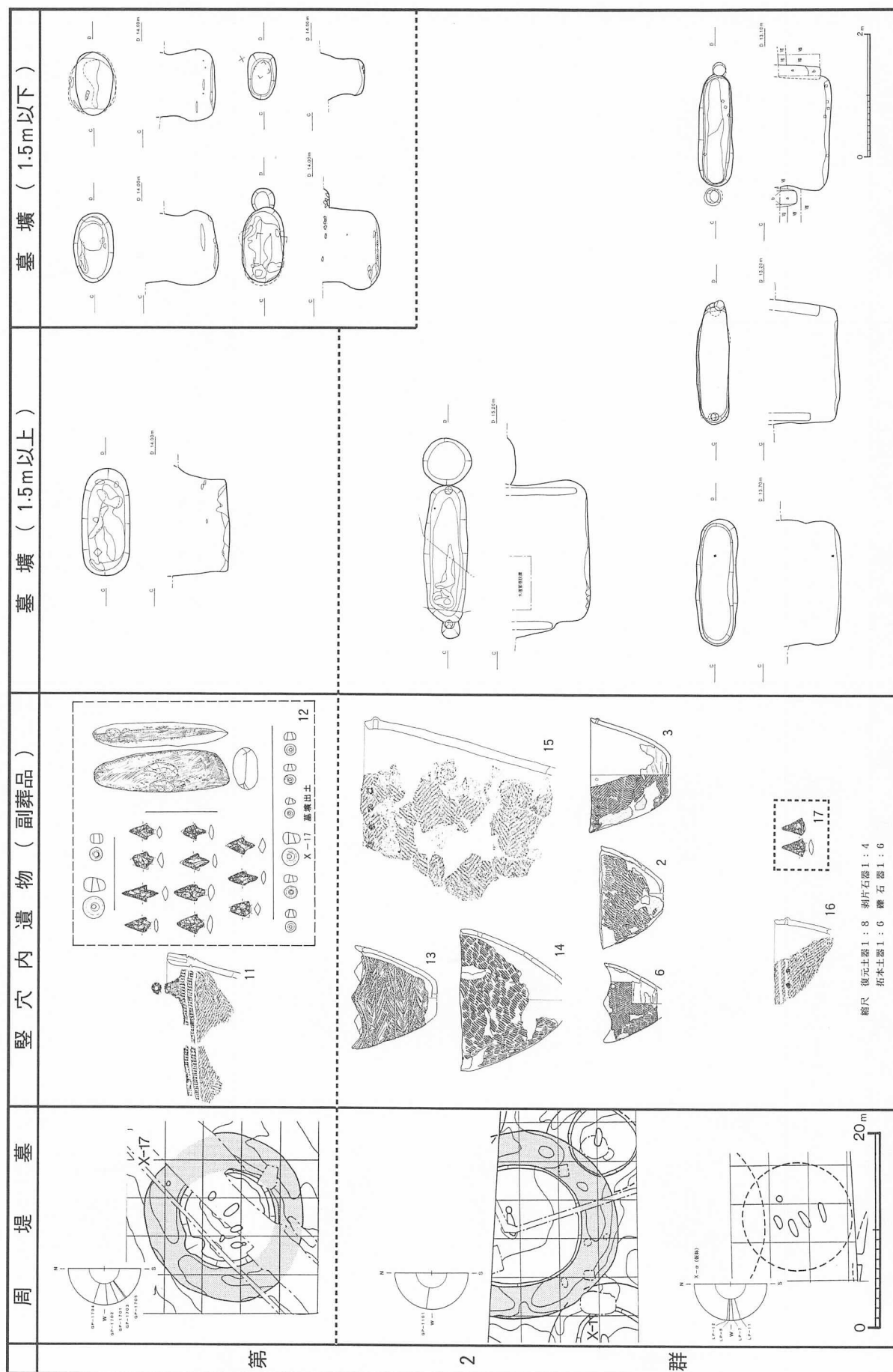
252

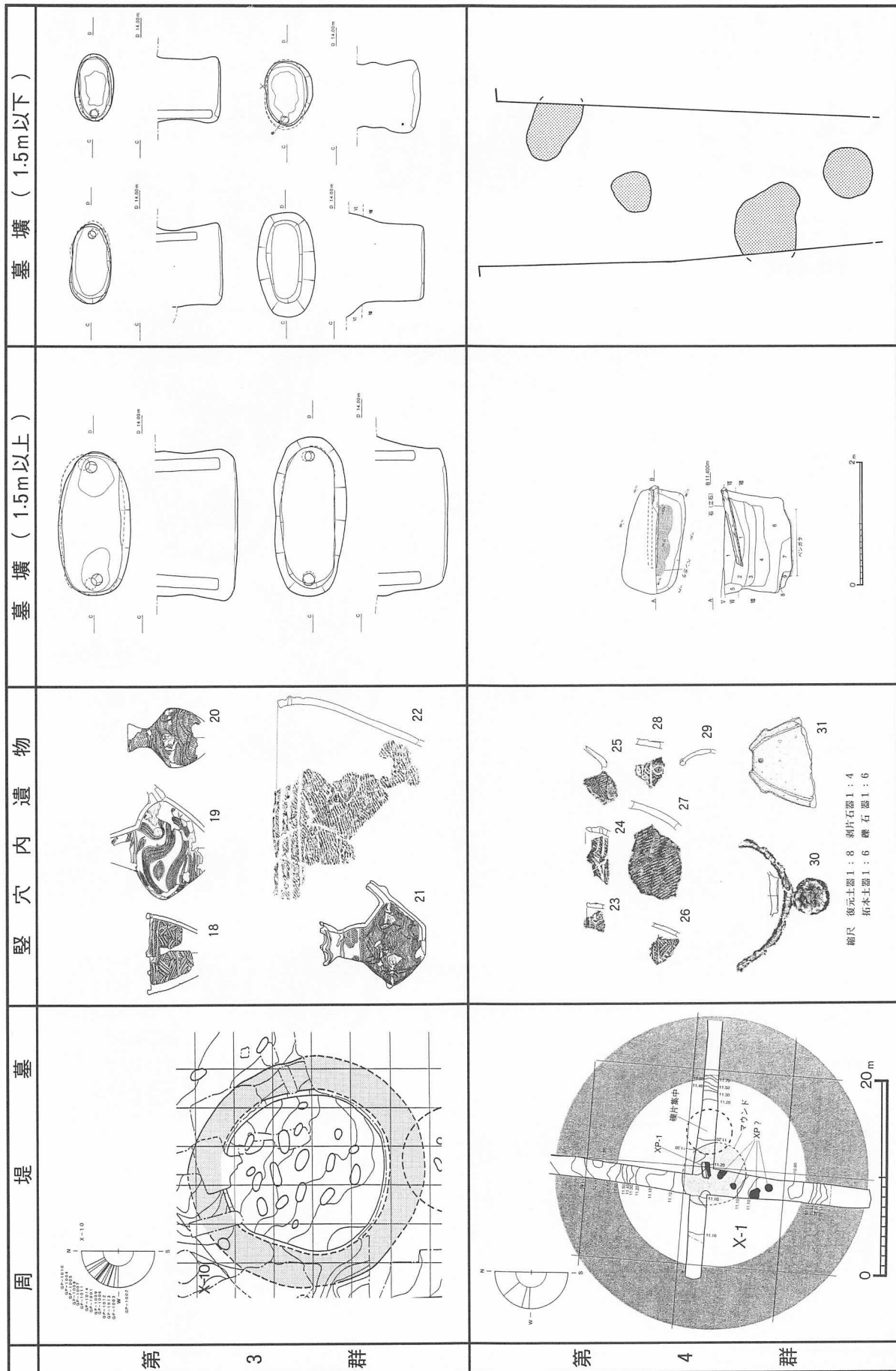
主要要素の変遷

分類	規模	周堤	出入口	マウンド	竪穴内遺物	墓域数	規模・形状	木柱	立石	礎	ベンガラ	副葬品	埋め方	長軸方向
主に1・2群	小	不明瞭	なし	なし	なし あってもまれ	1〜2	丸・長が湿もしくは一方のみ	なし	なし	なし	なし	なし	規制なし	そうう
			やや明瞭	あり	鉢	5前後	長く・狭いと丸みあり 周堤墓間で異なる	長い遺順 の内にあり	あり	あり	2重散布	玉・石斧・ 石鏃・漆器	規制あり	出入口向き ややそうう
			あり	あり	鉢・注口・壺	10以上	丸・長が混 丸みが強く	丸い墓域で も内にあり	なし	あり	床面あり	漆・弓	上部を 固める	ふれる
主に3群		明瞭						あり？ 墓域外	あり	墓域外				大きく ふれる
	大	顕在	あり	複数	石器も		丸みが強く	あり？ 墓域外	あり	あり	ない墓域 が多く	石鏃	上部を 固める	
主に4・5群														
主な特徴・変遷	※次第に大きく、深く			※当初から存在か	※多量化 多様化	※規模 に比例 ※多く はない	※一時期を除いて次第 に丸みを帯びる傾向	※次第に墓域外へ移動？ ※立石は後半に出現 ※立石は他遺跡と比べ 少ない	※一時期 加する も次第 に減少	※次第に多 種多様？ ※周堤墓間 格差大	※規制は 次第に 強化			※次第に ふれだす

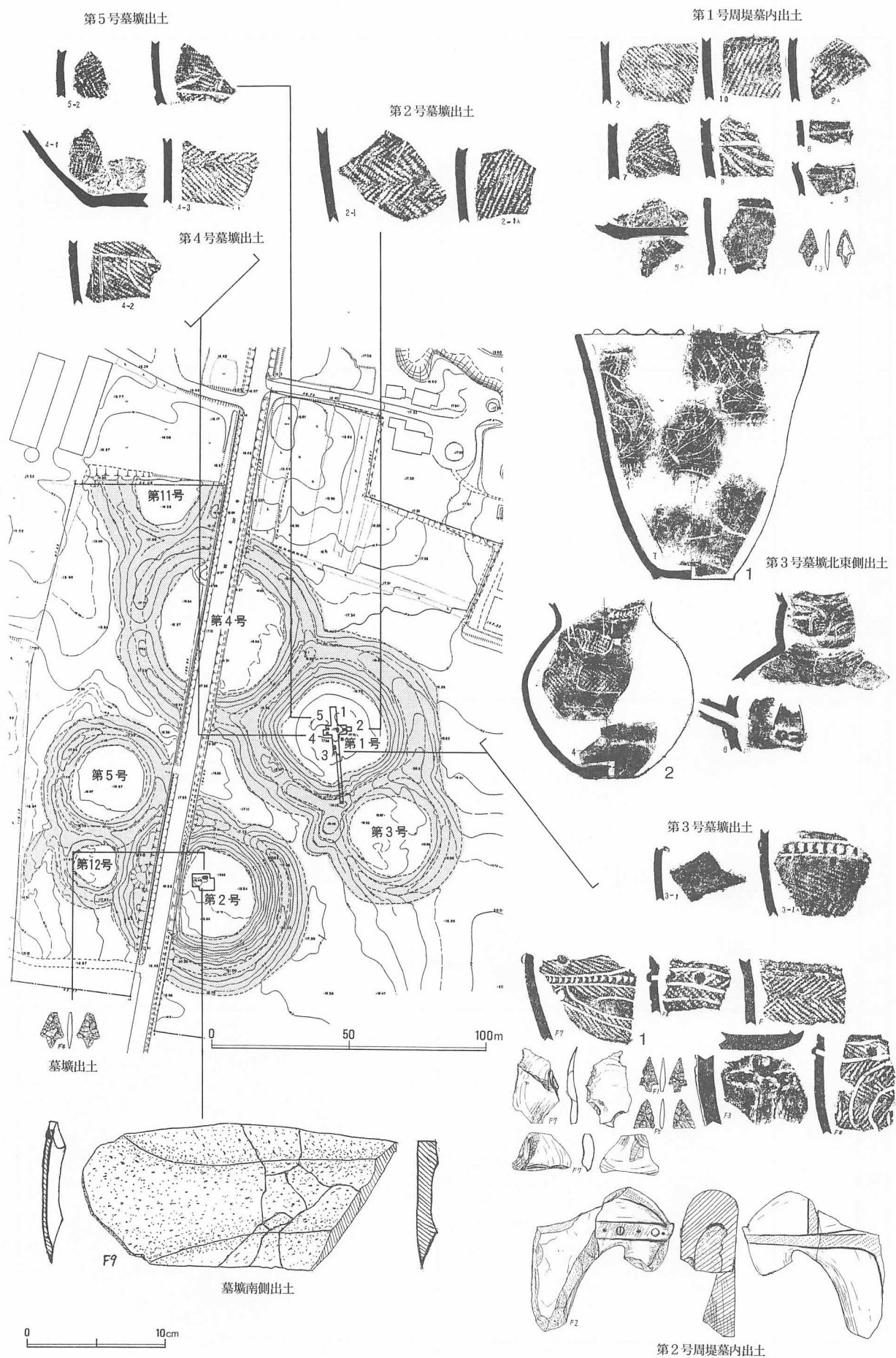


図VI-6 キウス4遺跡周堤墓の分類1 (第1群)

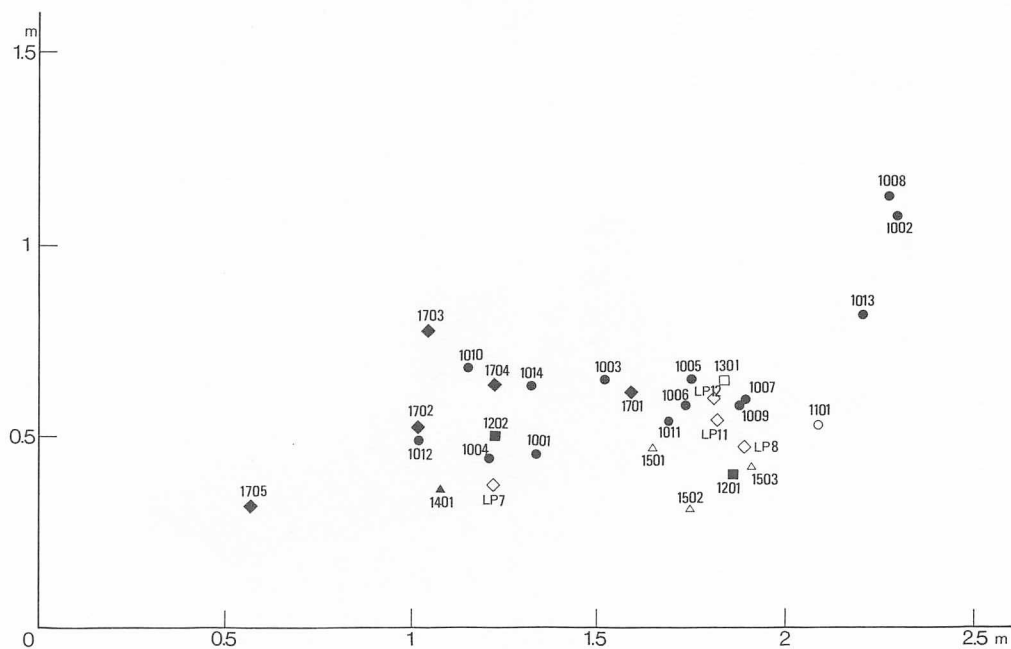




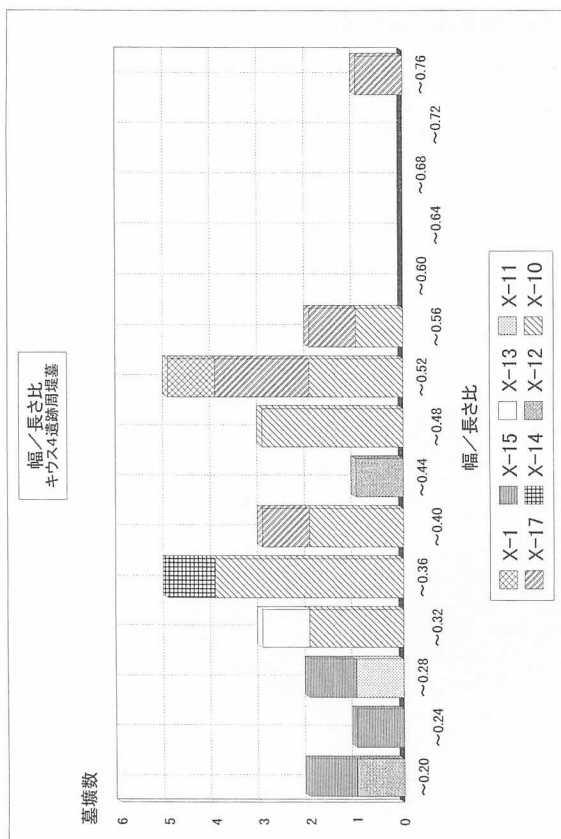
図VI-8 キウス4遺跡周堤墓の分類3 (第3・4群)



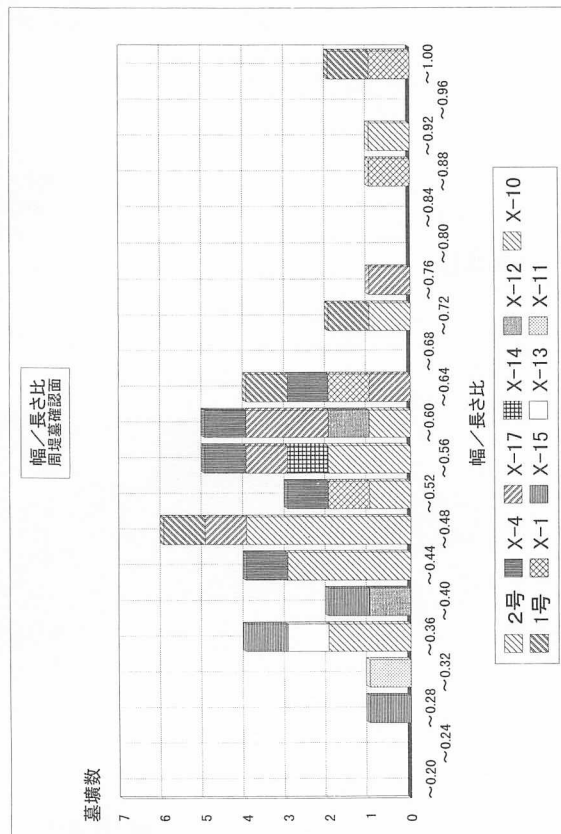
図VI-9 キウス周堤墓群と出土遺物



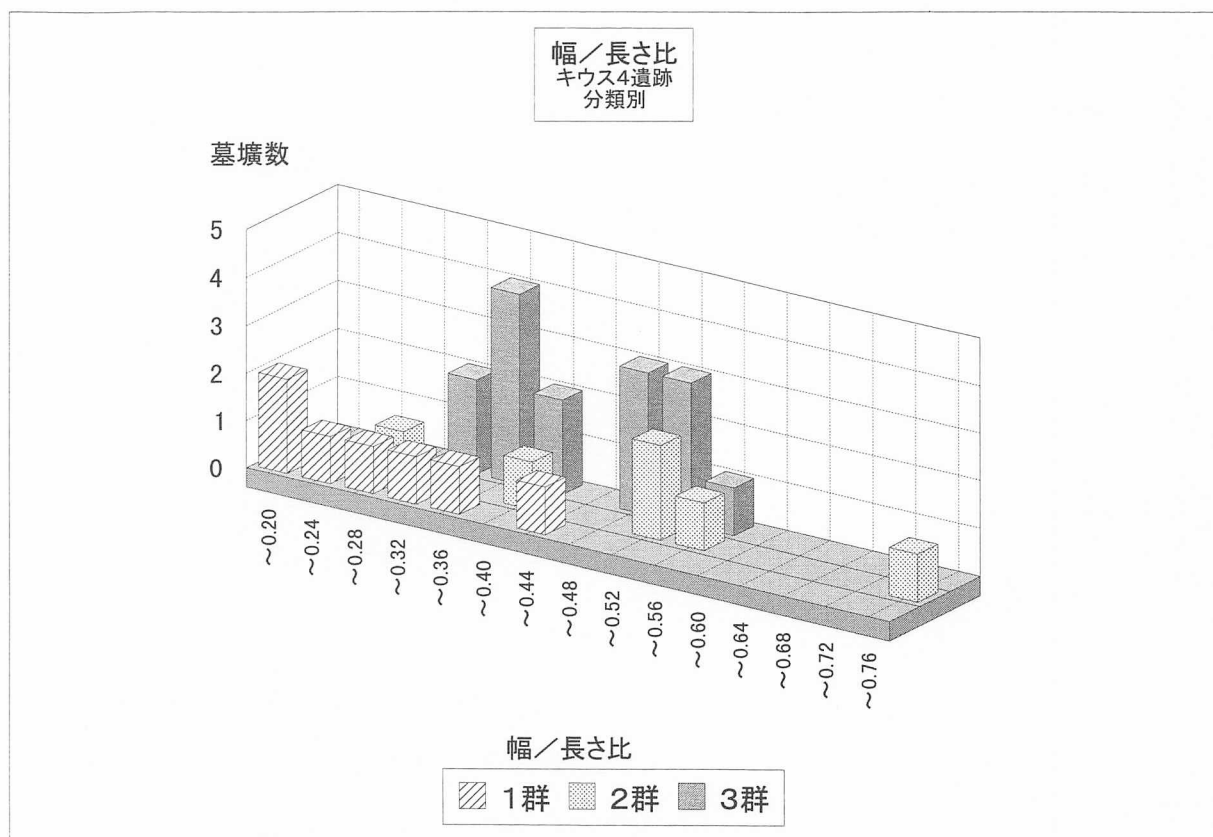
図VI-10 キウス4遺跡墓墳規模グラフ(墳底面)



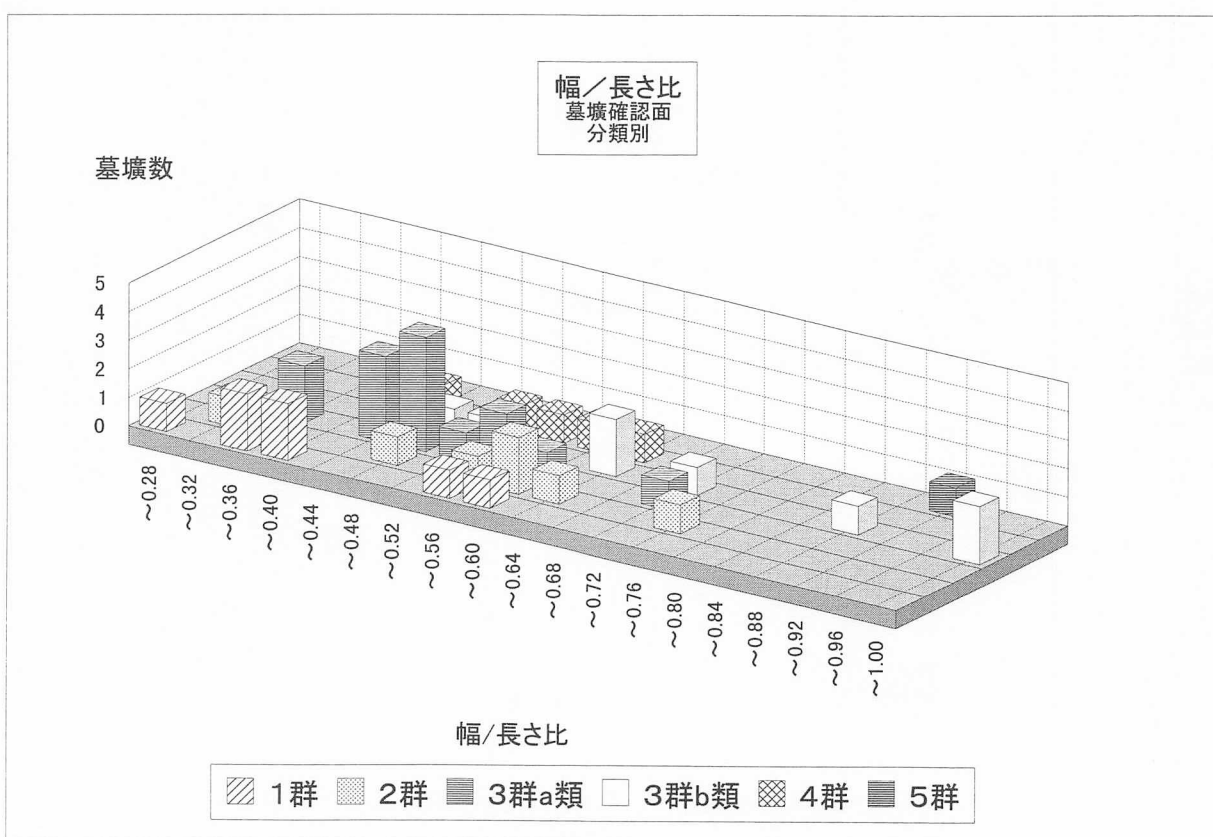
図VI-11 キウス4遺跡周堤墓墓壙 幅／長さ比（壙底面）



図VI-12 キウス4遺跡・キウス周堤墓群墓幅／長さ比（確認面）



図VI-13 キウス4遺跡分類別 幅／長さ比（墳底面）



図VI-14 キウス4遺跡・キウス周堤墓群分類別 幅／長さ比（確認面）